

---

# 涼宮ハルヒの消失-another-

るる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

涼宮ハルヒの消失 - another -

### 【Nコード】

N9754V

### 【作者名】 るる

### 【あらすじ】

改変された世界で、「鍵」となる4人を部室に集合させたキヨン。その後パソコンの画面に現れた究極の選択。原作とは逆の選択肢を選んでしまったキヨンの物語です。

## \* 1 (前書き)

「涼宮ハルヒの消失」の、途中のシーンからいきなり始まっています。原作を読んでから、こちらを読むことをお勧めします。

たくさん矛盾が生じるストーリーとなっておりますが・・・  
どうか温かい目で見守ってやってくださいw

\* 1

R e a d y ?

パソコンの文字が、俺に問いかける。

いや…、

俺の知っている、長門有希が…俺に問いかけている…。

今、全世界の…

いや、全宇宙の未来が、俺の手にゆだねられている。

俺は…どうしたらいい…？

…。

……。

しばらくして、決心がついた。

「長門、これは返すよ。」

俺はそう言って、白紙の入部届を長門に差し出した。  
すると…

長門が、見たこともない悲しげな表情を見せていた。手も震えて  
いる。泣きそうになっている。

…俺の決意が揺らいだ。

長門…… そんな表情… 見せないでくれよ…。

長門が、震える手で入部届を受け取ろうとした、その時。

…俺の手が反射的に、入部届を引っ込めていた……。

「ごめん長門。やっぱ俺…。」

そう言ってパソコンを眺める。  
Readyだと？

…この長門の顔を見て、エンターなんか押せるかつつの…！

俺の指が、パソコンのキーボードへと向かう。

そして

俺はバックスペースキーを押した……。

…パソコンに文字が浮き出る。

YUKI・N>あなたはエンターキーを押さなかった。

よって、再修正プログラムは発動しない。

それがあなたの出した答え。新しい世界であならしく生きてほしい。

それだけを言い残して、長門のメッセージは消えた。

## \*2（前書き）

2話ですー。キャラの口調が上手く表現できてないです。ごめんなさい><

\* 2

「…今の、何だったのよ?。」

ポニーテール姿の涼宮ハルヒが俺に問いかける。

まだ俺のことをよく知らないらしい、

違う世界の古泉と朝比奈さんも、不思議そうな目でこっちを見ていた。

長門も・・・

おどおどとした小動物のような仕草で俺を見つめていた。

俺と目が合った瞬間、顔を赤くして即座に目をそらしてしまったが…。

「まあいいわ。これからもこのメンバーで、定期的に集まるわよ!!  
無断で休んだりしたら、死刑だからっつ!!!!」

ハルヒはそう言い残し、古泉とともに去っていった。

…俺の体操服を着たまま。

これからここに来る時は、ずっとその格好で来るつもりなのだろうか。

「あ、あのう…、

わ、私もこれで、し、失礼します…。」



朝比奈さんも、遠慮がちに部室を後にした。

…残ったのは、長門と俺だけだ。  
長門は少し焦っていたが、顔を赤くしたまま本を取り出し、椅子に座って読み始めた。

……………状況を整理するか。

俺は、俺のよく知っている、宇宙人の長門から、  
- R e a d y ?  
と問いかけられた。  
それに対し、俺は……  
つまり『N o』を選んだ訳だ。  
と、いうことは……………

俺は今後ずっと、こつちの世界で過ごさないといけないのか。

俺のことを「ジョン」と呼ぶ、涼宮ハルヒ。  
ハルヒのことを好きとか抜かしやがった、古泉一樹。  
俺に恐怖感を抱いているであろう、朝比奈さん。  
そして、

普通の人間である、長門有希。

…俺以外の人類にとっては、これまでと変わらない日常生活なんだろうが、

俺は、今までと全く違う環境で生活しなければならないのだ。

…そう選択したのは、まぎれもなく俺自身なのだから……。

…そんなことを考えていたら、結構な時間が経っていたらしく、長門が本を閉じる音で、俺は我にかえった。

「あの、そろそろ……………」。

長門の顔は、さらに赤みを増していた。

長門の顔の赤さは、時間に比例するのではないかと思ったほどだ。

「待たせたらしいな。帰るか。」

……長門と一緒に下校するのも、これからの俺の日常になるのだろうか。

凍りつくような寒さの12月20日。

俺の人生が、動き出した。

**\* 3 (前書き)**

3話。あの人が登場します。

\* 3

すっかり暗くなってしまった夜道を、長門と肩を並べて下校する。  
長門のマンションまでたどり着くと、長門が何か言いたそうな顔で  
こっちを見つめていた。

「あ、あの…… 今日も、

長門がそこまで言いかけた時、

「あれ？ キョンちゃんと長門さん??」

もとの世界で、俺を殺そうとしていた人物、朝倉涼子がそこにいた。  
……くそ、こいつの存在を忘れていたぜ。  
こいつは宇宙人などではないと分かっているが……  
俺は、まだこいつを完全に信用できん。

「2人、いつも一緒に帰ってるの?」

朝倉の問いかけで、長門はまた顔を赤らめ、下を向いた。

「女の子1人じゃ危ないだろ。俺が送ってやってるんだよ。」

「ふーん。もしかして、今日も長門さんの家にお邪魔するつもり？」

「いやあ、別にそんなんじゃないあ……」

「そう」

長門が俺の言葉を遮った。

俺が不思議に思っていると、長門はさらに続けた。

「私が誘った。」

だから昨日も、彼は私の家にいた。」

俺はその言葉で、昨日のことを思い出した。

長門の部屋で話していたら、朝倉が急にやってきて、一緒に鍋を食うはめになっちまったんだっけ。

もしかしたら長門は、朝倉の誤解を解こうとしてくれたのか？

「長門さんから誘ったの！？」

……………。

大事な話だったのよね。

それだったら、昨日は邪魔しちゃってごめんなさい。

私は深くは問わないから…。

じゃあ、またね。」

そう言っただけで朝倉は、マンションに入って行っただけ。

ふう。

あいつには変な気を遣われてる感じがして、なんか落ち着かん。

「長門、今日も、その…お邪魔していいのか…？」

長門は無言で頷いた。

そのまま俺たちは、マンションの7階へと向かった。

お茶の乗った机をはずさんで、向かい合う俺と長門。少しためらって、長門は話し出した。

「……その……」

文芸部……入るの…？」

そうか。

妙に長門がそわそわしていると思ったら…

俺がいつまで経ってもあの入部届を持っていたからか。

今日、一旦返しそうになったもんだから…

長門じゃなくなつてそりゃあ気にするさ。

俺はポケットから、4つ折りにされた入部届を取り出した。  
文芸部、か。

特に放課後することもないし、

あの部室へ向かうことは、俺の日課になってしまったからな。

それに……毎日、この長門を観察しているのも悪くないだろう。

「長門、俺なんかが文芸部に入つて、迷惑じゃないか？」

「迷惑なんかじゃない。

むしろ……嬉しい。」

「そうか。」

毎日1人じゃ、そりやつまらんだろうし、寂しいだろう。

長門の言葉で、俺は決心した。

「長門、俺、入部するよ。

ボールペンを貸してくれ。ここに名前書けばいいんだろ？」



「……………!!」  
……………。  
「……………ありがとう。」

俺は入部届に名前を書き、長門に渡した。

眼鏡つきの長門は、入部届を宝物のように両手に包んで、「嬉しい」としか言い表せないような顔をしている。

そんな長門を見ていると……………

こっちの世界も悪くない、なんて強く思えてきた。

**\* 4 (前書き)**

4話なり。今日中に全話アップします！

\* 4

次の日。

俺はいつものように、1年5組へと登校する。

風邪をひいていた連中も、少しずつ回復のきざしを見せ始め、谷口もマスクをとって登校していた。

俺が席につくと、後ろから俺を呼ぶ声がした。

「おはよ、キョンくん。」

朝倉涼子だ。

…ああ、そうか。この世界では、ここはハルヒの居場所ではないのか。

今更こんなことを考える自分がちよつと憂鬱だ。

俺は無意識のうちに溜め息をついていた。

「なあに、溜め息なんかついちゃって。

もしかして、昨日、長門さんと何かあったの？」

朝倉は、興味深々というか…

『昨日何があったのかを知りたいんですけど』的な顔でこっちを凝視している。

「昨日はな、文芸部について話してたんだよ。俺は文芸部に入部することになったんだ。」

「へえ…キョンくんが文芸部……。ふふ、なんか似合わないね。」

「いいだろ、何だって。」

「いや、何でもないわよ。」

ただし、文芸部に入るって決めたんなら、長門さんをしっかりサポートするのよ。

そうでないと、許さないからね。」

一瞬、朝倉の目の色が変わった気がした。

「分かってるさ。」

あいつはずっと一人で寂しかったのさ。

これからはほら、俺がいるから、寂しくなくなるだろ?。」

「…キョンくんもしかして、長門さんのこと好きなの?。」

「はあ?」

いきなり何を言い出すんだ。」

「…ふふ、冗談よ。」

ちつとも冗談っぽくなかったように聞こえたのは、俺の気のせいかな。

…ここでチャイムが鳴り、俺たちの会話は中断された。  
朝倉がいまいち何をしたいのか、俺にはよく分かん。

放課後。

俺はいつものように、文芸部室へと向かった。

朝比奈さんがメイド服に着替えるのを目撃するシーンももうないだろうな、と思い、

ノックをせずにドアを開けた。

すると……………

そこにいたのは、長門だけではなかった。

長門と、俺の体操服を着た、ハルヒと古泉がいた。

「あんた、遅いわよ!!」

あ、それと、この体操服しばらく借りるから。

返してほしかったら、あたしたちがここに来る時のいい方法を考えなさい!」

…はあ。

性格は今までと変わらない自己中女か。

古泉が昨日と同じように、寒さで震えているのを見て、つくづくそう思う。

こんな女のことを好きとか言う古泉は、相当な物好きだな。

その日は、ミーティングをした。

朝比奈さんがハルヒに強引に連れてこられたのは言うまでもない。

5人で、今後の活動とやらを話し合った。

結局、決まったことは、

『今度からは、日曜に5人であの喫茶店に集まる』ということだけだ。

もちろん、何をするかは、団長様が土壇場で決めるんだろうが。

…帰り際、俺は古泉に呼び止められた。

「少しお話があります。」

そう言って廊下に連れて行かれた。

一体何なんだ。

「話ってなんだ。」

「手短に言いますと……」

…あなたは、長門さんのことが好きなのでしょうか？」

…おい。

古泉まで何を言うんだ。

その質問は、本日2回目だぞ。

「なぜそう思うんだ？」

「いえ、なんとなくです。

空気といえますかね。」

「はあ。」

「どうもこいつもどうかしてるぜ。」

「おや、不快でしたか？」

「いや、なんでもねえ。

とりあえず、今の質問に関してはノーコメントだ。」

「古泉くーん！！何してんの？帰るわよ！！」

ハルヒの声が廊下に響き渡る。

「いきなり変なことを聞いてすいませんでした。  
それでは。」

・・・全く。

古泉のハンサムスマイルを、また見ることになるとはね。

それにしても何だ、みんな揃って。

俺が、長門を好きだと？

そんなもん…知ったこっちゃねえよ。  
・・・けどな、



「長門、帰るぞ。」

（頷く長門）

…長門と帰れる日々が、ちよっただけ嬉しかったのだ。

**\* 5 - 1 (前書き)**

5話は2部構成?となっております。原作をかなり意識してみました。

今日は日曜日だ。

果たして今日が何の日か、皆さんは覚えているだろうか。

・・・そう、新SOS団が、喫茶店に集合する日だ。  
行つて何をするかつて？

そんなの・・・俺が知っているはずもない。

ハルヒが適当に思いついたことを適当にやる。

これが今までの俺のパターンだったからな。

・・・最後に着いた奴がおごり、という罰ゲームは、さすがにもう  
ないだろう、と思い、

ちよつと余裕をかまして駅前の集合場所へと向かう。

すると・・・

そこには既に、俺以外の4人全員が集合していた。

「遅いわよ、ジョン！！もっとやる気を見せなさい！！！」

俺が夏休みに一万五千回も耳にしていたらしい台詞（ちよつと違つ  
が…）を、

ロングヘアーの涼宮ハルヒがまた言いやがった。

やめてくれ。もうデジャヴはこりこりさ。

「遅いわねー！！罰として、今日のお茶代はジョン、あんたのおごりよー！！」

この世界は元の世界とつながっているのだろうか。  
言ったそばからデジャヴを感じてしまったのだが。

「へいへい。どーせ俺は、おごり専門ですよー。」

「なによそれ。」

…まあいいわ。あの喫茶店に入りましょっ！！」

半ば強引なハルヒの一声で、俺たちは店内に入った。

「・・・あのう、これから、なな何をするんですかあ？」

ちよつと怯えた様子の朝比奈さんがそう言った。

まだ俺たちに心を許していないようだ。

…それでも朝比奈さんは、真面目にここに来ている。

それが彼女の几帳面で純粋な性格だと言えるのだろうか。

「うーん・・・とりあえず、二手に分かれて市内パトロールでもしない？」

何か面白いことを見つけたら、あたしに報告するの!!  
どう!?! いいアイデアでしょ!!」

いいアイデアも何も・・・。

向こうのお前も、全く同じことをやってたぞ、ハルヒ。

「じゃ、くじ引きでグループ分けするわよ!」

俺たちはつまようじでできた、ハルヒ特製くじを引いた。

その結果、俺と古泉、ハルヒと長門と朝比奈さん、という男女別の組み合わせになった。

どうやら、くじ引きの結果には誤差があるらしい。

ここまで同じことが続くとなると、

さすがにくじ引きは違うものになってくれて安心する。

俺と古泉は、西側を探索することになった。

ハルヒはあの時とは違い、とても生き生きとした表情でその場を後にした。

「さて・・・。

今から何をします??」

「俺は特にすることはないぜ。

古泉は何かすることでもあるのか？」

「ええ。

あなたとちよつとお話したいと思ひましてね。

・・・この間の、異世界の話の続きをです。」

俺は古泉の言葉で、あの日のことを思い出した。

・・・消えたハルヒをようやく見つけ出し、過去がつながり、古泉と3人でパラレルワールドとか世界改変とかいう話をした日のことを。

あの話の続きがしたいというのが。

まあ、俺もその話は気にならんでもないからな。

・・・俺たちは自販機でコーヒーを買って、近くの木陰に座って話すことにした。

**\* 5 - 2 (前書き)**

5話後半です。キヨンと古泉の会話から始まります。

「あの日・・・僕と涼宮さんが初めて北高の部室に行った時、パソコンにメッセージが出てきて、あなたはバックスプースキーを押しましたよね？」

あれは・・・元の世界の長門さんからのメッセージだったのでしよう？

違いますか？」

「ご名答だ。

俺は結局【No】を選んだってこつた。」

「やはりそうですか。

・・・となると、ここはやはりパラレルワールドではありません。何者かによって改変された世界ですね。

つまり・・・あなたの人生は、12月18日で書きかえられてしまった、ということになります。」

「やっぱりそうか・・・。」

もしパラレルワールドだったら、違う世界で、違う『俺』が生活していたのだろうか。

でも長門のメッセージで、それは違うことが証明された。

長門は俺に、選択肢を与えたのだ。



元の世界を選ぶか、この世界を選ぶか。

「ただし、何もかも変ってしまったのは、世界中であなた一人です。僕は、この世界ではもともと光陽園学院に転校してきたのですから。」

あなた以外の人類はみな、今までの日常と何一つ変わりはないのですからね。」

「そうか……。」

でも俺は、不思議と後悔はしていなかった。  
それが何故なのかは、自分でも分からなかった。

「ただし、一つだけ……。」

このことを知っているのは、僕とあなたと涼宮さんの3人だけですよね。

これからは、このことを誰にも言わない方がいいと思うのです。  
なんとなくですが……

言ったらいけないような気がするのでね……。」

「言っわけないだろ。」

言っただって誰がそんな話を信じるんだよ。

現にそんなのを信じたのはお前とハルヒぐらいだな。」

「ありがとうございます。」

涼宮さんには、僕から言っておきますので。」

・・・このあたりで、俺のケータイが鳴り、喫茶店に一時集合することになった。

昼食兼グループのメンバー再編成をするそうだ。

くじ引きで再編成されたグループは、

俺と朝比奈さん、ハルヒと古泉と長門、という結果になった。

今度は、俺たちは北側を探索することになった。

朝比奈さんと、無言で肩を並べて歩く。

行き先は不明だが・・・俺はなんとなく、あの並木道を歩いていた。ただ・・・気まずい。

俺は朝比奈さんに殴られてしまったからな。

どうにかしようと思っていると、

「あの・・・っ!!!」

意外にも朝比奈さんが口を開いた。

「こ、この間はごめんなさい……。

私……びつくりして……。

いきなり、あんなことしちゃって……。

その……痛かった……でしょう??

ごめんなさい。

ほんとにごめんなさ……。」

そこまで言っていると、朝比奈さんは泣き出してしまった。

確かにあの時は痛かったが……悪いのは完全に俺だ。

そんなに謝ることもないだろう……。

俺はこつちの世界でも朝比奈さんは優しい人なんだ、ということ  
を再確認し、

とりあえず、近くにあったベンチに座るよう促した。

「……落ち着きましたか?」

「……ありがとう。」

本当に、謝り足りないぐらいです……。  
初対面なのに、殴っちゃって……。」

「いえいえ、謝るのはこっちの方ですよ。  
俺こそ初対面なのに、失礼なことを……。  
あの時は本当にすいませんでした……。」

「ううん、いいの。  
お互いさまね。」

えっと……. なんと呼べばいいかなあ？」

「ああ、もう『キヨン』でいいですよ。  
ハルヒのやつはジヨンなんて言ってますが……  
キヨンでもジヨンでもたいした違いはありませんよ。」

「キヨンくん、ね。  
これからよろしくね。」

なんて謙虚なお人なんだ、と思い、俺も軽く会釈をする。

「あ、でもキヨンくん……. その……. なんで……. . .  
ホクロ……. のこと、知ってたの……. ?  
私もキヨンくんに言われるまで、気付かなかったのに……. . .」

朝比奈さんは、顔を赤らめ、不思議そうな、疑うような表情を浮かべている。

……. さらに未来からやってきた、大人のあなたから教えてもらい

ました。

・・・なんて言える訳もなく、なんとか頑張つてごまかそうとした俺だったが、

ハルヒ団長様の招集命令を表す、ケータイの音でなんとか救われた。

ハルヒも、何も見つからなかったからといって怒っている訳でもなく、

逆に「今日は楽しかった!」とでもいうような、晴れやかな表情を見せていた。

・・・そうか。

ここは、ハルヒの機嫌で「閉鎖空間」とやらが発生するような、あり得ない世界じゃないんだ。

今までの俺が、「普通じゃない」世界にいた訳で・・・。

ある意味「平和」になった世界に、今の俺はいるのか。

もう、青い巨人なぞに襲われることだってない。

平和バンザイだ。

いつまでも、そう思っていたかったのだが・・・

・・・まさか、あんなことになるなんて、この時の俺は思ってもいなかった。

長門・・・俺の選択は間違っていたのか・・・？

**\* 6 (前書き)**

6話！ちょっとした修羅場・・・。

\* 6

それからだいぶ時が流れた。

クリスマスも、5人で盛大に祝った。

大晦日には、5人でスキーに行った。

これといった事件もなく、平和に、平凡に時が過ぎて行った・・・  
かのように思えた。

・・・俺が「こつちの世界」に来てから一カ月。  
1月18日になった。

どうやらハルヒは、北高SOS団部室への侵入ルートを見つけたらしく、

光陽園学院の制服で、部室に来るようになっていた。

今日も放課後、この部室に5人が揃った。

しかし・・・何かがおかしい。

空気が重たい。何なんだ、この空気は。

長門と朝比奈さんは、戸惑っておろおろしている様子だった。

古泉は、珍しく暗い顔で、溜め息をついていやがる。ハンサムスマイルのかけらもない。

ハルヒも暗い顔をしていた。

そして、古泉と離れた場所で、口を尖らせていた。

・・・どうやら、この空気の原因は、ハルヒと古泉にあるらしい。  
そう悟った俺は、ハルヒに尋ねた。

「おい、ハルヒ。何かあったのか？」

お前がそんな顔してるのは珍しいぜ。」

ハルヒは、俺の顔の方をぱっと向いて、俺の胸ぐらをつかんだ。

「ちょっとこっち来なさい。」

胸ぐらをつかまれたまま、俺は廊下へと連れて行かれた。

「ジョン、あんた、空気を読むっていうことができないの？」

「はあ？俺は何も知らん。」

あの気まずさの原因は何なんだ？」

「はあ。しょうがないわね・・・。」

ジョン、驚かないっていうなら教えてやってもいいけど。」

「俺は驚かん。何だ、言ってみろ。」



「・・・あたしね、古泉君に告られちゃったのよ。」

・・・俺は意外と驚いていなかった。

この世界の古泉に初めて会った時、古泉がハルヒのことを好きと告げていたからだ。

「・・・で、お前は何と返事したんだ？」

「・・・『ごめん。古泉くんと、これ以上の関係にはなれない。』って言ったわ。」

つまり、古泉はふられたってことかなるほど。それは氣まずいはずだ。しかし・・・

「ハルヒ、お前は何で、OKしなかったんだ？」

「そんなの・・・知らないわよ。・・・ジョンのばかつー!」

ハルヒは走って去って行った。  
・・・いきなりばかと言われても・・・。

「涼宮さんっ！！」

古泉が勢いよく部屋のドアを開けて、顔を出している。

「ハルヒなら、さっきそっちに行かなかったか？」

「いえ、来ていません。

涼宮さんらしき人影が、いつも僕たちが北高に出入りする侵入ルートに見えたので……。」

ああ、ハルヒはそこから脱走したんだな。  
あの気まずい空気は、俺でも耐えかねん。

「古泉、事情はハルヒから聞いたぞ。  
でも何で、こんな時期にいきなり告ろうと思ったんだ？」

「お聞きになられたんですね……。  
……僕自身、自分の気持ちにけりをつけたいと思っていたのもありますが……  
……涼宮さんの本心を知りたかった、というのが第一の理由です。」

「・・・何と言っているのか分かったが、古泉、落ち込むことはない。なんせ、相手がハルヒなんだからな。」

「・・・僕が涼宮さんに、その・・・振られたのは、単に『僕とはこのままの関係でいたい』という理由だけではないと思うのです。」

「ほう。何だ？その理由ってのは。」

「涼宮さんは、きつとあなたのことが好きなのですよ。」

「・・・。。。」

俺は何も言わなかった。

・・・というより、言えなかった。

「ふふ、これはあくまで僕の憶測にすぎませんので。涼宮さんもお帰りになられたので、ここで僕も、失礼します。」

古泉はあっさりとその場を立ち去った。

．．．．．なんだか、色々な事が起こりすぎている気がする。  
よく分からないのだが．．．．．何かが心に引っかかっているような  
気がした。

．．．部室には、俺と長門と朝比奈さんの3人。  
長門は読書、朝比奈さんは宿題をしている。  
俺は特にすることもなく．．．気がついたら知らないうちに眠って  
いたらしい。

俺は夢を見た。

暗い夜道に、街灯のオレンジ。  
道端には、元気にヒマワリが咲きそろっている。  
俺は、1人の少女の後ろ姿を見ていた。  
誰なのかは分からない．．．．．  
でも、どこかで見たような

．．．．．とんとん。  
誰かが俺の肩をたたいた。  
目を開けると、そこには長門がいた。

「ん．．．．．俺、寝てたのか．．．．．  
起こしてくれてありがとよ、長門。」

長門は少し赤くなった。そんな仕草はまだまだ新鮮に感じる。

．．．俺が帰り支度をしていると、ふと、俺の腕を長門がつかんだ。

「どうかしたか？」

「その．．．．．」

だ、大事な話があるから．．．私の部屋に、来て．．．欲しい、の。

「

真っ赤になった長門を見て、俺は悟った。

これから何かが起こるに違いない、と。

**\* 7 (前書き)**

7話・・・。今回、物語が動きます！

\* 7

古泉のハルヒへの告白。

部室で見た不思議な夢。

そして、長門からの急激な誘い。

絶対、何かあるに違いない。

・・・あれからちょうど一カ月、か。

何事もなく、普通に、普通の話をしてくれることを望みつつ、  
俺は長門の部屋の中央、机の前に座っている。

しかし・・・

長門はなかなか話を切り出そうとしない。

やめてくれよ・・・

今更、宇宙人です、とか言われたって俺は信じんからな。

・・・そろそろシラケ空気に耐えられなくなった俺は、思い切って  
こう切り出してみた。

「長門、屋上に行かないか？

星でも眺めてたら、少しは気が楽になるだろうよ。」

長門はちよつと嬉しそうな顔で頷いた。

そして俺達は、屋上へと向かった。

さすがに冬の夜だ、夜風は容赦なく、2人の体を冷やしていく。  
屋上は、星空と街のイルミネーションで、幻想的な雰囲気をかもし  
出していた。

長門はその幻想的空間が気に入ったらしく、少しだけ顔を緩めた。  
そして、何かを決心したかのような表情を作った。

長門がやっと、口を開いた

「私は・・・あなたと初めて図書館で会った日から、ずっとあなた  
のことを考えていた。

ずっと・・・あなたが好きだった・・・。」

俺と長門との間の距離、わずか1メートルほど。

その間を、冷たい夜風がびゅうつと吹き抜けて行った。

長門は自分が用意していた台詞を言い終わると、即座に顔を赤くし、  
下を向いた・・・。

・・・とほぼ同時に、俺の中で様々な感情が動き出した。



『あなたと初めて図書館で会った日』。

これは、実際の「俺」が体験した記憶じゃない。

改変される前の世界の長門が、情報操作かなんかで書き換えた、

「『俺』にとつての架空の記憶」だ。

でも・・・この世界の長門は、それが「『真実の記憶』だという設定」になっていて・・・

つまり・・・

俺が実際にしてもいないことなのに、それが長門の心を動かすきっかけになっていた訳で・・・。

そのことを、この長門は知らない訳で・・・。

それでも長門は、俺のことをずっと想ってくれていた訳で・・・。

そんなことを考えてると、無性に胸が痛んだ。

この後長門にどんな言葉をかけようか、と、思考回路を働かせてみたのだが・・・

体は意志と関係なく、反射的に動く。

・・・俺は、長門を抱きしめていた・・・。

長門がどんな顔をしているのか、もちろん俺には分からない。  
だが・・・

ちよつとだけ熱い体温。やや高まった心臓の鼓動。

これらを確かに長門から感じ取った俺の感覚神経は、正常に動作していたと言えるだろう。

体を離れた後、俺は話し始める。

「ごめんな、長門・・・

俺だって、自分の気持ちなんかよく分からん。

でも・・・

お前を見ると、

ここまで言い、俺は異変を感じた。

長門の表情がみるみるうちに変わっていく。

ドキドキしている少女の顔から、恐怖と焦りの入り混じった顔に。

その間、わずか1秒。

俺が異変を感じたのとほぼ同じ瞬間。

長門が叫んだ。

「危ない…………っ!!!!!!!!!!」

何の緊急事態だ！？と思い、後ろを振り向く……  
どこかで見たような光景が、そこにあった。

包丁を持った朝倉涼子。

俺が朝倉を認識したのと同時に、朝倉が言う。

「長門さんに何してるの？」

そんなことしていいと思ってるの？

長門さんに不用意に近づく者は許さないって、そう言ったじゃない？

だから、今からそれを実行するの。」

包丁を振りかざす朝倉。

長門も俺も、突然の出来事に驚き、平然でいられない。  
くそ……体が動かねえ…………っ!!!!!!

朝倉の持っている包丁が振り下ろされた。  
この瞬間、悟った。

俺は、死ぬ。

何もかも終わったな、と思い、目を閉じた

．．．．．おかしい。

あれから数十秒たったはずだ。なのに．．．  
どこも痛くねえ。

俺は不信に思い、恐る恐る目を開けた．．．．．すると。

見たこともない人物が、素手で包丁を受け止めていた。

俺は驚きで言葉を失った。

ちよつと待てよ。そんなことができるのは……「あいつ」だけじゃなかったのか……？

「お前……誰だ……？」

やつのことで振り絞った第一声が、これだ。

その人物は、包丁を持ったまま、こっちを振り向いた。

……長門か？

……いや、違う。

髪型、顔、背丈は、今までの長門有希そのものだ。

しかし……

真っ黒の髪、透き通った青い目。眼鏡はかけていない。

そこだけが「長門有希」と違っていた。

そいつは、ゆつくりと口を開いた。

そして、確かにこう言った。

「長門 雪」

**\* 8 (前書き)**

8話ですね。新キャラ作ってしまいましたwwどうかお許しを・・・

「長門 雪」。

黒髪に青目の少女は、確かに、静かにそう言った。

なんということだ。

俺は、人生で、同じように違う人間を3人見てしまった気分になった。

元の世界の、宇宙人の長門有希。

今の世界の、内気な少女の長門有希。

そして、

圧倒的なオーラを放つ、長門雪。

朝倉の包丁を素手で受け止めているのだから・・・どうやら普通の人間じゃないらしい。

状況は、何というか・・・ものすごく悪いのだが、

長門雪は俺の瞳をまっすぐと見つめている。

一方で、長門有希の方は、状況をよくのみこめていないようで、口を開けたまま、驚きの表情で固まっている。

俺は、長門雪が何なのか、気になって仕方がなかった。

「長門雪……お前は何者なんだ。」

「……銀河を統括する情報統合思念体によって作られた、  
対有機生命体コンタクト用超最新型ヒューマノイド・インターフ  
エース。」

それが……私。」

……一度聞いたことがあるような台詞を、長門雪は淡々と述べた。  
しかし、「超最新型」という部分だけが違っていたな。

「この状況を回避し、かつあなたに重要な話をしなければならない。  
よって、一時的に現在の全世界の流体時間を結合する。」

何を言っているのか俺にはよく理解できんかったのだが……  
長門は包丁を持っていない方の手を、空中に差し出した。  
そして……

俺の目の前の空気をつかむような動きをした。  
それから長門がゆっくりと手を開いた。

……。

何か変わったような気もするが……そうでない気もする。  
……だが。



風の吹き抜ける音、車が道路を走り抜けていく音、飛行機が大空を飛ぶ音。

何一つ、音が聞こえない。

と同時に、マンシヨンの屋上から見える街のイルミネーション、相変わらず交通量の多い車、全ての動きが止まっていた。

もしかして……………

「長門……………時間を止めた……………のか？」

「そう。」

長門はあっさりそう言っ、静かに包丁を離れた。  
朝倉も固まっ、いて、ピクリとも動かない。

長門有希も、驚いたまま、全く動かなくなっ、ていた。

どうやら本当に、俺と長門雪意外の全人類、全世界の時間が止まっ、てしまったようだ。

「来て。」

俺が混乱していると、長門がそう言い、おもむろに歩きだした。

やつのことで一步を踏み出し、俺は長門の後を追いかけた。

「……『静寂』とはまさにこのことを言うのだろうな、という状況を、

そろそろ現実として受け止め出した頃。

俺と長門は、公園に到着した。

俺の中で、変わり者が集うという評判の、光陽園駅前公園だ。ベンチに腰かけると、長門雪が口を開いた。

「今、世界のバランスが大いに崩れている。」

いきなり重大なことを聞かされてしまったようだが、さらに長門雪は続けた。

「もともとあるべき過去が、あなたの二者択一によってないものとは化してしまった。

よって事実上、今現在と過去は繋がっていない。

それは世界の時間連続体に変な負荷をかける。

あなたはこれから、それを修正しなければならない。」

「……」

長門「……何だっけ？」

せめて・・・俺にも分かるような言葉で説明しとくれよな・・・。

## \* 9 (前書き)

9話です。長門ってただでさえ難しい言葉を使うのに、文章力のな  
いわたしがさらにわかりにくくしている気が・・・w  
そしてこの回で原作と矛盾が生じている気が・・・^^；

\* 9

「あなたが涼宮ハルヒに行っているであろう過去の動作が、あなたがエンターキーを押さなかったことで、ないことになっている。」

「……全世界の時間を軽々と止めやがった長門雪が、静かにそう言った。」

「どういうことだ、長門。俺が過去でハルヒにしたことだと……？」

「そう」

「……七夕のことか？」

「そう」

「でも……世界が改変されて記憶が書き換えられたのは、1年前までだろ？」

「だったら、俺が東中のグラウンドに石灰で絵を描いて……朝比奈さんと一緒に戻ってきた過去は、」

確かに存在しているはずだぜ。

この世界のハルヒだって、ジョン・スミス覚えていたし……。  
」

「そのことではない。

あなたが言っている過去は、確かに存在している。

しかし、別の時間軸から時間遡行して、涼宮ハルヒにある言葉を  
かけなければならない。

あなたは既に、涼宮ハルヒにヒントをもらっているはず。  
」

俺がハルヒにヒントをもらっている、だと……？

そんなん到底思いつけないだろう、と思ったのだが、  
案の定、一つだけ思い当たる節があった。

光陽園学院の制服を身にまとった、ハルヒと古泉に初めて  
会ったときだ。

いつもの喫茶店に入り、俺はハルヒから、こう告げられたんだっけ。

「『世界を大いに盛り上げるためのジョン・スミスをよろしく！』  
か。  
」

「そう」

・・・そうか。

俺はまだ、ハルヒにその言葉をかけていない。

しかし、ハルヒは確かにその言葉をかけられていた。

その言葉をかけていなかったら・・・ハルヒは「ジョン・スミス」を覚えていないかもしれない。

そうだったとしたら・・・世界が矛盾する。

それに、12月20日。

ハルヒと過去が繋がったのは、その言葉があったからだ。

つまり・・・今の俺が過去に時間逆行して、その言葉をかけなければ、

「今の世界」もないことになっちまう、ということか。

長門雪は、「世界のバランスが大いに崩れている」と言った。  
なるほどだ。その意味が、ようやく分かってきた。

「ん・・・ちよつと待てよ。」

この世界の朝比奈さんは、未来人じゃない、普通の人間だ。  
だったら・・・過去に戻ることは不可能じゃないのか・・・？」

我ながら、素直な疑問だったと思う。

しかし、長門雪はそれ以上に素直な返答をしてくれた。

「私は超最新型ヒューマノイド・インターフェイス。」

情報統合思念体が、万一の場合に備えて、長年私を開発していた。そして12月18日、完全体の『私』が完成した。新たな機能として、時空を超え、操る力を身に付けた。よって過去へは、私が連れて行く。」

.....

なるほど。俺は一瞬のうちに全てを理解したような気がした。

長門雪は、情報統合思念体が長い間造っていた、一番性能のいいインターフェイスだったのだ。

世界が改変され、何もかも変わってしまったと思っていた。

がしかし、宇宙は変化していなかった。

情報統合思念体は残っていたんだ。

もし俺が、エンターキーを押さなかった時のために、長門雪を開発していたのだ。

宇宙は計り知れない。

何もかも、知っていたのか。

それにしても・・・

時空を超え、操る力を身に付けた、だと？

そんなん・・・長門と朝比奈さんと古泉が一体化したようなもんじゃないのか。

恐るべし、情報統合思念体。

奴らに出来ないことなんかない、と思ったほどだ。

「そう長くこうしていることは出来ない。

こうしている間にも、世界のバランス崩壊は続いている。

直ちに3年前に遡行しなければならぬ。」



「待て。」

時間を止めたまま・・・行くのか？」

「そう。」

この公園に着くまでに、ある程度の処置は施した。

私がこの空間を離れても、問題ないようになっている。

それに、今流体時間の凍結を解いたら、大変危険。」

長門（有希）と朝倉をほったらかしにしてきたもんな。

それに、長門が施した「処置」とやは、時間が止まっている時だけ有効らしいしな。

「分かったよ、長門。」

世界が終つちまったら、俺のせいだもんな。

・・・連れてつてくれ、3年前に。」

「了解した。」

そう言つて長門は、俺の手を握った。

俺は何回時間旅行をしたのだろう。

分かん。思い出せん。

しかし・・・

今回は、一緒に行く相手が違う。

朝比奈さんではない・・・

長門、

雪とともに

## \* 9 (後書き)

ここまで読んで下さってありがとうございます。  
次回で最終回です。

どうか最後までお付き合いください。

**\* 1 0 / F i n a l ( 前 書 き )**

最終話です！読んで下さって本当にありがとうございます！  
もっと上手い文章が書けるようになりたいです。

\* 10 / F i n a l

うえ、気持ち悪い。

以前にも味わったことのある、強烈なめまいが俺を襲った。

・・・うつすらと目を開ける。

目の前には、黒髪青目の長門雪がいた。

・・・そうか。

俺たちは、中学生バージョンハルヒに言葉をかけるためだけに、時間遡行してきたのか。

それにしても・・・暑い。

「長門、ここはもう3年前なのか・・・？」

「そう。

3年前、7月7日の午後9時07分。  
今から歩いて目的地へ向かう。」

「目的地って・・・東中か？」

「東中ではない。中学校を出たちよつと先の路地裏。歩いて帰っている途中の涼宮ハルヒに、声をかけなければならぬ。」

「なんでそんな・・・細かい設定までされてるんだ？」

「そうしないと、未来が成立しないから。」

簡潔だが・・・深い意味合いの言葉だ。

「そうか・・・。」

あ、その前にさ、あの公園に寄って行っちゃだめか・・・？  
あそこには、俺と朝比奈さん2人がいるはずだろ。  
なんか興味深くてな。」

「それはだめ。」

「なんでだ？」

「そこで大人の朝比奈みくるに遭遇してはいけない。」

「なぜ？」

「そうしてしまうと・・・未来が成立しないから。」

なるほど。

未来は過去に基づいているんだっとな。

「そろそろ目的ポイントへと向かう。」

・・・俺と長門は、無言で歩き、目的地とやらに向かった。

・・・ふと、長門が足をとめた。

「」

「ハルヒは来るのか・・・？」

「もうすぐ」

・・・待つこと数分。

俺は心の中で、言つべき台詞をおさらいしていた。

「来た。」

長門のつぶやきの合図で、俺は我に帰った。

よし、この言葉だけで世界が救われるんなら……

でっかい声で言つてやるさ!!

未来の俺のためにもな!!

「おい!!!!!!」

出来る限りのでかい声で叫んだ。

ちよつと幼い涼宮ハルヒは、ぱつとこっちを振り向いた。

「世界を大いに盛り上げるためのジョン・スミスをよろしく!」

ハルヒはしばらくこっちを眺めていたが、ぷいっと振り返り、去つて行つた。

見事な去りっぷりだった。まるでまた明日会えるかのような……



・・・憶えといってくれよ、ハルヒ。ジョン・スミスをな・・・・・・・・。

・・・今思えば・・・

いつか、居眠り間際に見た夢は、このことを暗示していたのではないかと思う。

暗い夜道に、街灯のオレンジ。

道端には、元気にヒマワリが咲きそろっている。

俺は、1人の少女の後ろ姿を見ていた。

それは、中学生ハルヒだったのだ・・・・・・・・。

俺が幻想的雰囲気に入っていると、長門雪がおもむろに声をかけた。

「あなたには今、選択権が下された。」

「・・・・は？」

「今から長門有希のマンションへ向かい、処置を施せば、

改変後の出来事をリセットし、元の世界へ戻ることができる。

それを選ばないのであれば、私が改変後の世界、つまりあなたがさっきまでいた世界に

連れて帰る。」

.....。

「どういう意味だ.....？  
もしかして.....」

今から俺が、『長門有希』のそこへ行つて、『処置』とやらを施してくれば、

俺は元の世界・・・

宇宙人、未来人、超能力者がいる世界に戻るかもしれない、  
つてことが・・・！？」

「そう」

長門雪は淡々と言った。

今更.....そんなこと言つな.....。  
俺は「こっち」を選んだんだ。  
今更、あっちなんて.....

急に、ショートヘアのハルヒの姿が浮かんた。

あつちでは・・・ハルヒの居場所は「俺の後ろの席」なんだよな・・・。

SOS団はみんな同じ学校にいて・・・

朝比奈さんが毎日、メイド姿でお茶を出してくれて・・・

長門は・・・

俺のことを「好き」なんて言ったりしない・・・

・・・俺は迷った。

俺は、元の世界のハルヒに会いたかった・・・。

『そんな非日常の学園生活を、お前は楽しいと思わなかったのか？』

俺が俺自身に問いかける。

元の世界の生活・・・。

宇宙人、未来人、超能力者。

神様扱いされるハルヒ。

巨大カマドウマを退治したり・・・  
七夕に時間旅行したり・・・  
一万何千回と夏休みを繰り返したり・・・  
なんでもありな映画作りをしたり・・・

・・・当たり前だ。楽しかったに決まってるじゃねえか！

でもな・・・

『私は・・・あなたと初めて図書館で会った日から、ずっとあなたのことを考えていた。』

ずっと・・・あなたが好きだった・・・。

そう言ってくれた長門有希はどうなるんだ？

俺はまだ、ちゃんとした返事をしていないじゃないか。

このまま・・・ほっとける訳がないだろ・・・。

すまない、向こうの世界の

長門、朝比奈さん、古泉、そしてハルヒ・・・・・・・・。

俺はもう、「こっち」を選んでしまったんだ。

「長門・・・、俺はもう、少し前に、こっちで生きて行くと決めたんだ。」

長門のマンションには行かない。  
すまないが、俺を連れて帰ってくれないか。

時間を止めたままだったろ。  
このままじゃだめだからな。」

「了解した。」

やはり長門は俺の手を握り、気持ち悪い感覚が、俺を襲ってきた・・・。

うう。

目を開けると、そこは一面の銀世界になっていた。  
空からは、水じゃなくてもっと寂しい粒が舞い降りてきていた。

「ユキ・・・。」

俺はつぶやいた。  
すると・・・、

「・・・・・・・・え?？」

・・・・・・・・目の前に、眼鏡をかけた長門有希がいた。  
そうか・・・・・・・・俺は、戻ってきたんだな。  
でも、さっきまでいたはずの朝倉と長門雪が、いなくなっていた。

「あ、あの・・・・・・・・  
さっき・・・・・・・・・・何て言おうと・・・・・・・・、したの・・・・・・・・?」

すごく恥ずかしそうに、でもちゃんと俺の目を見て、長門は言った。  
そうか、俺にはまだ言い残したことがあったのか・・・・。

「ごめんな、長門・・・  
俺だって、自分の気持ちなんかよく分からん。  
でも・・・  
お前を見ると、

お前を見ると、守ってやりたい、って思うんだ。」

「え．．．．？」

「俺はお前を放っておくことなんかできないんだ。  
お前は、俺がついてなきゃダメな気がするんだ。  
だからさ．．．．」

（キヨン、長門の手を握って）

．．．．これから、ずっと一緒にいていいか．．．？」

長門は驚き目を丸くして、それから顔を赤らめ、少し下を向いた。  
少ししてから顔をあげ、俺の目を真っ直ぐ見て、ほのかに笑って言った。

「．．．．ありがとう。」

．．．．その後も、SOS団の活動は続いている。  
またわがままハルヒ団長様に振り回される羽目になったのは、言うまでもないが．．．。

俺は自分の選択が、間違っていたとは思わない。  
後悔なんてしていないさ。  
なぜなら・・・

俺はSOS団の団員その一だからだ



\* 1 0 / F i n a l (後書き)

読んで下さって本当にありがとうございました！

これは1年前ぐらいに書いたもので、1日でうp終わりました

w w

今読み返してみると・・・「朝倉と長門雪はどこ行ったんだ!？」とか

色々と疑問が^^；

まだまだ未熟ですね。

それでも読んでくれる人が居るってすごく嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9754v/>

---

涼宮ハルヒの消失-another-

2011年10月9日15時24分発行